「舞姫」指導の試み

―生徒の積極的参加を促すために―

渡辺春美

はじめに

高等学校における国語の授業は、乱暴に言えば、「読解」が主流となっている。説明的文章においては「要旨」を、文学的文章においては「主題」を明らかにすることが授業内容となっている。授業者は念入りに下調べをし、授業で生徒を巧みに誘導しながら、結局は授業者の読みを伝えていくという「伝達型」の授業が中心である。私は、この「伝達型」の授業を、生徒による「参加型」の授業に変え、なんとか授業を活性化したいと考え授業実践を行ってきた。生徒の一人一人が、興味・関心を持続し、問題意識をもって参加する授業を作り出すことによってはじめて一人一人の生徒に力をつけることができると考えるからである。

この論稿では「舞姫」の授業実践を通して、一人一人に力をつけるために、生徒にどのようにして興味・関心を持続させ、問題意識を持たせるかということを探ってみた。

一、教材と授業のねらい

① 教材

「舞姫」（「新現代文」三省堂）は、高校生が最も深い関心を寄せる作品の一つである。雅文体による言葉の抵抗はあるが、「舞姫」には、構成上、私達を全編にわたってその世界に引き寄せる用意が周到になされている。

更に、高校三年生という時期は、恋愛に憧れをもちながら、同時にその現実的な在り方に関心を寄せる時期である。異国を舞台に繰り広げられる恋愛はそれだけで関心を呼び、心を捉えるに違いない。生徒は「舞姫」の世界を追体験しながら、様々な場に身を置いて愛の現実的な在り方や生き方について考える。若い感性から豊太郎を批判し、徹底して憎む

ものもいるだろう。批判しながら、同情する者もいるだろう。エリスの生き方に疑問を持つ者もいるかもしれない。このように考えながら生徒は自らの生き方を探って行く。

「舞姫」は、生徒の興味・関心を持続させ、さまざまに考えさせる力を持った作品と言える。

② 授業のねらい

「舞姫」の授業を行うにあたって、二つの大きなねらいを設定した。

イ、「舞姫」を丁寧に読むことを通して、生徒一人一人に、愛の在り方や生き方について自らの考えをまとめさせる。

ロ、生徒に興味・関心を持続させ、問題意識を持たせることによって積極的に授業に参加させる。

ここでは特に一斉授業の形態の中で、ロ、のねらいの達成を検討することにする。

二、授業のねらいを達成するための工夫

授業のねらいを達成するための方法として次の点を工夫してみた。

① 導　入

導入は、通常、生徒の教材に対する興味・関心を高め、授業効果を上げるために、授業に入る直前に行われている。(注1) しかし、もっと以前から意識的に導入を行うことによって更に効果を上げることができると思われる。二学期後半の「舞姫」の授業に対して、私は一学期からさりげない導入を行ってみた。

② 学習目標の明示

授業者は明確な授業目標に基づいて生徒に指示・発問を行いまとめていく。すべての指示・発問が授業者の中では意味付けられている。しかし、生徒の中では意味付けは曖昧で、それは、視界の利かぬ場所にいる者が、どこに行くかわからぬままに手を取られ、一歩一歩展望の利く高みに導かれているようなものである。学習目標を明示することは、到達すべき地点への指標を与え、そこへ向かって自ら歩くよう促すことである。

この「舞姫」の授業では、後で学習目標について自己評価させることを課して目標を意識化させることを試みた。

③ 一読総合法方式の導入

「教材」の項で述べたように、「舞姫」には、最初の一文から最後の一文に至るまで読者の興味・関心を掻き立てる工夫が周到になされている。豊太郎の「人知らぬ恨み」が、劇的な展開のもとに次第に明らかになっていく過程を、興味・関心を失わずに読み進めるには、一読総合法方式を導入した読みを試みるのがふさわしい。

④ 学習課題の設定

「舞姫」を五場面に分けて、三、四場面を更に前・後半に

分けてそれぞれに学習課題を設定[注2]し、授業で場面に入る前に生徒に課した。授業内容についてあらかじめ考えさせるためと授業展開の道筋を意識させるためである。

⑤ 読み取りノートと感想文

各場面を読み終えた後に、「読み取りノート」にまとめさせた。「読み取りノート」は、場面の内容を端的に表す「小題」の欄と内容をまとめる「登場人物の心情」・「心情の背景」の欄、それと「感想」の欄とから成っている。生徒の主体的な取り組みの中で内容の全体像が明らかになるように工夫した。また、「感想」欄を設けることで、絶えず生徒自身の考えを求めることにした。感想文はその延長として生徒の様々な考えを述べられるように配慮した。

⑥ 板 書

高等学校の授業では、板書に十分な注意が払われていないように見受けられる。この授業では生徒の理解を確かなものとするための板書を特に注意して心がけた。

三、授業の計画と展開

① 計 画

授業は概ね次のような時間配分で行った。

一場面 1時間
二場面 3時間
三場面 4時間（前半―2時間 後半―2時間）
四場面 4時間（前半―2時間 後半―2時間）
五場面 2時間
まとめ 1時間・・感想文と自己評価

② 対 象

三年二クラス（各四七名）

③ 展開の概略

各場面ごとの授業は概ね次のように展開した。

ア、「学習課題」を配布する（一場面では学習目標も併記）。
イ、各場面の朗読テープをかける。
ウ、語句の意味を明らかにしたり、易しく言い換えたりする。
エ、内容を発問しながらまとめ、板書する。
オ、朗読テープを再び聞き、内容を味わう。
カ、「読み取りノート」をまとめる。

☆朗読テープは、イ、オ以外にも時間があれば聞かせることを心がけた。

☆内容をまとめる際には、時に応じて訳読し理解を促した。

④ 具体的展開

ここでは紙数の都合で一場面と五場面を示すこととする。

［舞姫］ 1 森鷗外 組 番氏名

学習目標

1 語句に留意し、内容を理解する。
2 豊太郎の心情を場面毎にとらえる。

3　豊太郎の心情の変化をその背景とともに考える。
4　豊太郎とエリスの愛の在り方について自らの考えをまとめる。

学習課題（一場面）

一、次の語句を分かり易く言い換えてみよう。
◇熾熱灯の光の晴れがましきもあだなり
◇日ごとに幾千言をかなしけん
◇さらぬも尋常の動植金石
◇浮世の憂きふしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言うも更なり
◇一抹の雲のごとく
◇さはあらじと思えど

二、次の事柄について考え、まとめよう。
1　豊太郎は、今何のためにどこにいるのですか。
2　「東に帰る今の我は、西に航せし昔の我ならず」とあるが、「西に航せし昔の我」と「東に帰る今の我」のそれぞれについてどうなのかまとめなさい。
3　「日記ものせむとて買ひし冊子もまだ白紙のままなるは」とありますが、それは何故ですか。
4　「人知らぬ恨み」は、豊太郎にどのような影響を与えていますか。
5　「その概略を文につづりてみむ」とあるが何の概略を書こうというのか。

板書事項	発問・注意事項
舞姫　森鷗外 ［一場面］ 帰朝―サイゴン ◇西に航せし昔の我 紀行文日ごとに幾千言をかなしけん 希望　積極的　知識欲 ↔ ◇東に帰る今の我 日記もまだ白紙のままなる理由 ×ニルーアドミラリイの気象 ×浮世の憂きふし ×人の心　我が心の変わりやすさ 人知らぬ恨み 一抹の雲 ← 惨痛 ← 一点の翳 その概略を文につづりてみむ （人知らぬ恨みをもつに至った事情）	↑豊太郎は、今何のためにどこにいるのか。 ↑昔の我と今の我はどう違うか。 ↑なぜか。 ↑豊太郎にどのような影響を与えているか。 （どのように変化したか） ↑その概略とは。 ☆核心をぼかして読者の関心を引く手法に留意させる。 ☆生徒にも展開に関心を持たせるように配慮する。

〔舞姫〕　5　森鷗外　組　番氏名

学習課題（五場面）

一、次の語句を分かり易く言い換えてみよう。

◇われとともに東に帰る心なきか、～聞きて落ちゐたり。

◇その気色、いなむべくもあらず

◇なんらの特操なき心ぞ

◇鉄の額はありとも、～一寸ばかりも積もりたりき。

◇余が彼に隠したる顛末をつばらに知りて。

◇余が病は全く癒えぬ。

二、次の事柄について考え、まとめよう。

1「承りはべり」と答えるに至った経過をたどってみよ。

2「わが脳中にはただただわれは許すべからぬ罪人なりと思ふ心のみ満ち満ちたりき」とあるが、豊太郎は何故これほど苦しんだのだろうか。

3「わが豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺きたまひしか」について「欺きたまひし」とはどういうことを指して言っているのか。

4「エリスが生ける屍を抱きて、千行の涙を注ぎしは幾たびぞ」とあるが、ここには豊太郎のどのような思いが表されているか。

5「されど我が脳裏に一点の彼を憎む心、今日までも残れり」とあるがどのような点で彼を憎んでいるのか。

三、太田豊太郎・相沢謙吉・エリスのそれぞれについて触れながら、舞姫を読んだ感想をまとめなさい。

板書事項

〔五場面〕

天方伯の帰郷への誘い
・気色いなむべくもあらず
・本国・名誉を失う

承りはべり → 特操なき心

われは許すべからぬ罪人なり

豊太郎の苦しみ
・自分を信頼している人（エリス）を裏切ったから
・エリスを愛していたから
・人間として恥ずべきことをしたから

エリスの反応←相沢の説明

かくまで我をば欺きたまひしか
・相沢に与へし約束
・大臣に聞こえ上げし一諾

生きる屍

抱きて千行の涙を注ぎしは幾たびぞ
・後悔・悲哀・やるせなさ・すまなさ

一点の彼を憎む心
・相沢の助けがエリスと別れるきっかけとなった
・エリスに事情を告げ精神的に殺した点

発問・注意事項

←「承りはべり」と答えるに至った経過はどうか。

←天方伯の誘いを承諾した自分を豊太郎はどう思っているか。

←豊太郎は何故これほど苦しむのか。

←「欺きたまひし」とはどういうことを指して言っているのか。

←豊太郎はどのような思いで涙を注いだのか。

←どのような点で相沢を憎んでいるか。

⑤「読み取りノート」
参考に生徒のまとめたものを示す。

舞姫　森鴎外　三年（十八）組（四十七）番　氏名（山出谷典子）

場面	小題	登場人物の心情	心情の背景	感想
①	帰航	豊太郎――五年前 希望にあふれ、世間の人々にもてはやされ得意になり、知識欲もあった 現在 人知らぬ恨みに頭のみ悩ましたればなり 深い後悔の念が残っている	豊太郎は日本へ帰るために船にのっている ほかの船客とも交わらず、美しい景色も見ずに船旅をすごしている	豊太郎の「人知らぬ恨み」の内容がはやく知りたくなった。今までのいきさつを回想文にするのはとてもよい手巧だと思った 読者の感心をこちらに向けさせるにはぴったりだと思う
②	まことのわれ	今までの豊太郎 ・ひたすら父の遺言と母の教へに従い、所動的・器械的であった ・人にさからう勇気もなく心は合歓の木の葉や処女のようだった 現在の豊太郎 ・人の思うままにあやつられている自分に気づき、独自の思想を抱くようになった	豊太郎をまことのわれに目ざめさせたのは大学の自由な風であった	豊太郎は自尊心は人一倍高いくせに臆病者だと思う 母や官長の言いなりになって今までの年月をムダにしてしまったのではないか？そんな豊太郎を少しかわいそうにも思った。少し遅くなったが本当の自分に目覚めることができてまだよかったと思う

③前	出会い	・豊太郎はエリスを一目見て引かれてしまう ・エリスは父の死を嘆き悲しみ、座長のいいがかりや母の冷たい仕打ちに途方にくれている ・そんなエリスを豊太郎はかわいそうに思う ・そしてエリスもやさしい豊太郎に好感をもつ ・同郷人たちは豊太郎を色を舞姫の群れに漁するものとした	豊太郎は散歩をしていて偶然エリスと出会い、エリスの家に行く そしてエリスを助けるために父の葬式代として時計を手渡す それからエリスと豊太郎の交際が始まり、同郷人にあやしまれる	勉学のことしか頭にない豊太郎がよく泣いている少女に声をかけることができたなあと思った。今までの豊太郎とは少しちがうように思う 私は人の弱みにつけ込むシャウムベルヒと、自分の娘を打つ母にとてもはらがたった
③後	新しい生活	・豊太郎は免官と母の死にダブルショックをうける ・そんな豊太郎は今までより深くエリスを愛するようになる ・豊太郎とエリスはつらく貧しい生活の中でも楽しかった	豊太郎は免官になる 豊太郎は母の死を知る 豊太郎はエリスはまづ師弟の交わりを生じ、それから離れがたき仲となる 相沢謙吉の助けで豊太郎は社の通信員となり、エリスの家に寄寓することとなった そして豊太郎の学問は荒んでいくが知識は統括的になる	お母さんの死と自分の免官を同時にしらされた豊太郎はとてもかわいそうだと思った。しかし豊太郎はエリスがいたのでまだよかったなあと思った
④前	相沢の誘い	・豊太郎はエリスの妊娠にとまどう ・豊太郎の心は楽しからず ・相沢は豊太郎の名誉を回復させてやろうと思う ・エリスは悪い便りがきたと思い、豊太	明治二十一年の冬 エリスが妊娠する 相沢から手紙がくる 天方伯に翻訳を頼まれる 相沢にエリスと別れると約束す	相沢という人はとても友達思いだなあと思った 豊太郎はゆうじゅう不断だと思う。妊娠しているエリスをすてる約束をするなんて信じられな

④前	④後	⑤
相沢の誘い	ロシアへの旅	別れ
郎にすてられるのを恐れている ・天方伯は豊太郎のドイツ語を利用しようとしている ・豊太郎はエリスの愛と名誉回復の間で揺れながらも、結局友の言葉に従うことを決める↑弱き心	・豊太郎はまた弱い心で友にさからうこともできず、ロシア行きを承諾する ・エリスは豊太郎を厚く信じているのでロシア行きにひどく心を悩ましていない ・豊太郎はロシアで成功してもエリスを忘れなかった ・エリスはベルリンで一人さびしかった ・大臣は豊太郎に大きな信頼をもっていた ・豊太郎は自分の足を縛して放たれた鳥のようだと思った ・ドイツに帰りエリスと再会した時、豊太郎は一瞬低回踟躇の思ひが去り、エリスと共に生きようと思った	・豊太郎は特操なき心でいなむことができなかった ・豊太郎はエリスに何といおうかと思い自分は許すべからぬ罪人だと思う ・エリスはすべてを知った時、豊太郎にここまで欺かれたと思った
頼まれた翻訳を一夜でやり終えてしまう	豊太郎は天方伯についてロシアへ出発する ロシアで豊太郎は仕事において大成功をおさめる エリスは日ごとに手紙をよせ、豊太郎の帰りをまっている 豊太郎はベルリンに帰りエリスと再会する	豊太郎は大臣に日本に帰ると約束してしまう 豊太郎は冬のベルリンの街をさまよい歩き、そのまま倒れてしまう ある日相沢が尋ねて来て、エリ
い。とんでもない奴だ。もう少し自分の考えをもった方がいいと思った	エリスの手紙などから、エリスが豊太郎をどれほど愛しているかということがよくわかった。それにひきかえ豊太郎はやっぱり優柔不断でだらしないと思う。豊太郎の心は栄達を求める心とエリスとの間で揺れ動いてあっちへいったりこっちへ行ったり…エリスが豊太郎の心を一心につなぎとめようとするのもむじゃきでかわいそうだった	気が狂ってしまうほどエリスは豊太郎を愛したけれども結局はむくわれることがなく、とてもかわいそうだった エリスをこんな風にした豊太郎がとても憎らしかった。そのエ

・豊太郎は千行の涙を注いだ
・豊太郎は脳裏に一点相沢を憎む心が今日までも残っている

スにすべてを話してしまう
エリスは精神的に死んでしまい気が狂う
豊太郎はエリスの母に少しばかりの資本を与え、エリスとおなかの子供を残して日本へ帰ってゆく

リスをおいて自分だけ日本に帰り、幸せになろうとする豊太郎になにか許せないものを感じた豊太郎が相沢を憎むのは筋ちがいだと思う。すべては自分の弱き心がひきおこしたことなのだから

四、舞姫の感想

次に、生徒の感想「舞姫を読んで」を二編示す。

ドイツに渡ってから豊太郎に変化が起こったものは、大きく二つある。①一つは、自我の目覚めと言おうか、今の所動的・器械的である自分に疑問を持ったということだ。ここで興味あることは、この時の豊太郎の年歳である。この時豊太郎は二十五歳であるが、現在と比較してみるとどうも少し遅すぎるような気がする。それも日本の地でなくドイツの地でこのような状態となるのは当時の日本の恐ろしさなどを感じる。ひょっとすると鷗外はこのことについても何か触れたかったのでは、という気が僕の心に起こるのです。さて、周囲の反応はといえば、このような豊太郎を猜疑し讒誣するのであるが、彼らこそ自己を悟っていず、豊太郎にあって彼らにないものを求めているのかもしれない。あるいは彼らはすでに自己を悟っていて、豊太郎がまだ完全に自分に目覚めていないことに何かいら立ちを感じているのであるかもしれない。ここでは彼らは何か悪者のように書かれているが、僕が彼らならきっと豊太郎は一人でいきがっている者として移ると思う。

豊太郎が変化したことについての②二つ目はもちろんエリスとの出会いだ。免官されエリスと共に貧しき生活を送る。でも僕が思うには③この時こそ豊太郎の最も幸福な最も人間的な最も自由で何者にも束縛されていない時期のような気がする。学問は荒みぬとかわけのわからないことを言っているのが後になって豊太郎もそのように思ったにちがいない。でもこの時の問題はやはり④経済的苦難でエリスが妊娠したことも相重なって相沢の誘いにのる。「我をば見捨てたまはじ」あぁ、なんて心をとらえるセリフだろう。こうまで言われても豊太郎はエリスを偽ってしまう。いや、このように言われたから安心させるため偽ったようにも思える。しかし、天方伯にエリスと別れることをほのめかされ、帰朝を約した豊太郎にはどうしても⑤反感を覚えてしまう。⑥エリスをとるか名誉を

とるかは難しい選択だ。僕が豊太郎の立場なら―。少なくとも、深く広く考え自分で決断したい。見かけの損得に惑わされず。最後に、明治文語体は読解するのが困難だった。
（男）

この生徒は、豊太郎の変化を二つに分けて捕らえている。即ち①と②である。①については、思春期の「自我」と「近代自我」の混同が見られる。②については、その意味を③と適切に捕らえている。しかし、①と②の関連については理解が十分ではない。①と②は変化とその発展を捕らえることによって事情がはっきりする。更に、豊太郎が帰郷するに至った事情について、問題は④にあると捕らえている。これは後で「名誉」と言い換えているが、十分に理解が及んでいないように見受けられる。

このように、理解の不十分な点もあるが、「舞姫」を通してよく自分の思いを検証している。特に後半、「こうまで言われても」と豊太郎に反発し、「いや」と理解を示しながら、「しかし……どうしても」と豊太郎への反感を確認する。この揺れの中に検証の過程がある。更に、この生徒は、改めて⑤のように問題を立て豊太郎を追体験しようとする。生徒は「僕が豊太郎の立場なら」と考える。しかし、答えようとして、心の揺れに答えられない。答えを得ることが「読む」ことの深まりを意味するのではない。「読む」ことの深まりは、揺れの中に、検証の過程の中に求められる。

次に示すものも揺れの大きい感想文の一つである。

私がこの物語を読み終えてからまず考えたことは、豊太郎という人はなんと⑥意気地なしで卑怯なんだろうということでした。このことは授業で読み進む間にもかんじていましたが最後はひどいように思えたのです。確かに豊太郎自身が悩み続けていたように、友情と愛情の板ばさみとなりどちらも失いたくないがために、どっちつかずな態度をとってしまったという気持ちはとてもよくわかります。私だってもし何か二つのものについて、どちらか一つだけと言われれば、ものすごく悩んでしまってなかなか決心がつかないからです。でも、エリスがどれほど自分のことを愛してくれているかをはっきり悟っていて、自分もエリスを必要だと言わんばかりなのに、どうして何も考えずに軽く返事をしてしまうのか理解しがたいところです。私にしてみれば、返事は後日に、とでも言ってエリスと相談すればいいと思うのですが。でも、私は女だから、エリスの気持ちには完全に同調できるとしても、男である豊太郎はできないのかも知れません。あの友情の背後には、人間なら欲しいと思ってしまう名誉が隠れていたのですから。まして、以前の豊太郎はそのような地位にいたのだからなおさらでしょう。⑦それでもやはり私は、すっきりしません。（女）

―後略―

この生徒は豊太郎に焦点をあてて感想を述べている。その前半を取り上げてみる。この生徒は①から出発し、豊太郎への共感と

反感の間を揺れ動いて、②にたどり着いている。たどり着いた地点は確かなものではない。しかし、そこに至った過程の中に確かな深まりを見ることができる。生徒は①と捕らえた豊太郎に「確かに」「よくわかります」と理解を示し、「私だって」と自分に引き付けて考え共感する。しかし、納得はできない。「でも」、「どうして」と疑問を発し、「私にしてみれば」と、もう一度自分に引き付けて考え豊太郎を批判する。私には、生徒の「どうして」という問いがせつなげに響く。更に、生徒は視点を変えて考える。友情の背後に「人間なら欲しいと思ってしまう名誉」を見て取り、男女の観点の違いから考えようとする。そして、男である豊太郎は「まして」「なおさらでしょう」と理解し共感する。「それでもやはり」納得はできない。この生徒の到達点は確かな地点ではない。しかし、最後に「すっきりしない」と言うところに、確かにこの生徒の生き方の原形が読み取れるのである。

五、自己評価

授業がすべて終わった後で、学習目標に対する到達度を次の項目ごとに自己評価させた。

次のことがらについて自己評価しなさい。
1、語句（特に学習課題について）に留意し学習できたか。
2、内容（話の筋）を理解できたか。
3、豊太郎の心情を場面ごとに把握することができたか。
4、豊太郎の心情の変化をその背景とともにかんがえることができたか。
5、豊太郎とエリスの愛のありかたについて自らの考えをまとめることができたか。
☆よくできた—A　だいたいできた—B　できなかった—C

その結果は次のとおりである。

項目	A（%）	B（%）	C（%）
1、語句	二〇・七	六五・三	一三・八
2、内容	六二・一	三三・三	四・六
3、心情	四二・五	四八・三	九・二
4、変化と背景	四〇・二	五二・九	六・九
5、愛の在り方	三九・一	四九・四	一一・五

これはあくまでも自己評価の結果である。厳しく評価した者もいれば、甘く評価した者もいるであろう。従って、客観的とは言い難いが、ある程度の実態を表していると見ることはできよう。この結果によれば、AとBを合わせるとどの項目も九割に近いか、九割を越えており、ある程度の成果を収めたとは言える。「1、語句」について「A」の項目が低いのは、授業で取り扱っ

た語句の数が少なく、折々に訳読しながら授業を展開したものの、なお言葉の抵抗が大きかったことを示している。しかし、それが読みの障害になっているのではないことは、「2、内容」の「A」の数値が示している。この「1、語句」と他の項目、取り分け「2、内容」との差を埋めるものとして「読み取りノート」、「板書」の効果を考えることもできるのである。

しかし、なお、厳しく問われなければならないのは、各項目の「C」の生徒の存在である。この生徒をどう捉え、どう対処するかが今後の課題である。

六、考　察

次に、授業の全体を振り返って、授業の「ねらい」と「工夫」が有効であったかどうかを検討することにする。

まず、導入については、生徒が次のように書いている。

「三年生になってすぐ先生が、『舞姫は（前年度三年生の間で―筆者注）非常に評判が良かった』と言ったので、私はすごく期待していた」。

感想文の書き出しで同様の趣旨を述べているものが四人いた。残念ながらこの生徒は、続いて「私はがっかりした。なぜならば、私は、文語体で書かれている物（ママ）は嫌いだからだ。それでも授業は始まった。」と書いている。

導入に触れているのは僅かに四人である。しかし、触れる必要の無い感想文中で触れているところに、私は、さりげない導入の意外なまでの効果を見るのである。

一読総合法方式を導入した読みの試みはどうであったか。男子生徒の一人は、作品の構成に触れ、「読者に先を読ませたいと思わせるにはとてもすぐれている。」、「たえず興味をそそりながら展開している。」と述べ、女子生徒の一人は「とにかく展開がおもしろかった。『どうなるんだろう。どうなるんだろう。』と胸をわくわくさせながら、読み進められた。」と述べている。更に、「読み取りノート」の一場面の「感想」の欄で、「興味をそそられる」・「豊太郎の悩みをはやく知りたい」という趣旨の感想を述べた者が、二二名いた。これらのことを考えると、舞姫における一読総合法方式を導入した読みの試みは、確かに効果的であったと言えよう。

「読み取りノート」は内容把握を確実にした。また、一人一人に場面ごとに感想を求め、読みへの参加を促した点で良かった。ここに記した感想はまとめとしての感想文につながって行ったと思われる。ただ、「登場人物の心情」と「心情の背景」の欄に混乱が見られた。

「学習目標の明示」、「学習課題」の設定については、生徒の興味・関心を高め維持する効果があったと実感するが、早急な結論は避けたい。

「板書」は、前章で少し触れたように、生徒の内容把握を容易にするうえで役立ったと思われる。しかし、ここでも早急な結論は避けるべきであろう。

おわりに

一般的に最も広く採られている一斉授業の中で、一人一人の生徒に力を付けるために、生徒の一人一人が興味・関心を持続し、問題意識をもって参加する授業を作り出すことを試みた。ある程度の成果を収めえたとは信じる。しかし、残された課題は多い。

学習目標明示の効果や板書の効用を調べる必要もあろう。ここでは生徒に積極的参加を促す方法を工夫し、それに基づいて実践を行ったが、生徒による「参加」の授業から、さらに、生徒の「主導」による授業が試みられてもよい。また、生徒の興味・関心、学力に応じ、班別学習や個別学習が試みられてもよい。更に実践を深めたい。

（一九八八年十一月二十九日稿了）

（大阪府立和泉高校教諭）

（注1）大槻和夫先生「基礎講座授業改善の方法2『授業の成立をめざして』」（「月刊国語教育」3月号東京法令出版一九八五年）を参考にさせて頂きました。

（注2）「学習課題」の作成にあたっては、「国語教育研究」第二十六号・中巻（広島大学教育学部光葉会）掲載の「『舞姫』学習指導の展開と反省」（築地道江）を参考にさせて頂きました。

※　本稿は第二十九回広島大学教育学部国語教育学会で発表したものに加筆したものである。